



性接待
禁女将

『部屋はどちらになりますか？』

『良い部屋だねー』

『窓からの景色もきれいな』



今日のご予約のお客様は、県外から来られた議員さんたち。

議員さんたちに満足していただければ、この旅館が評判になるかもしれない？

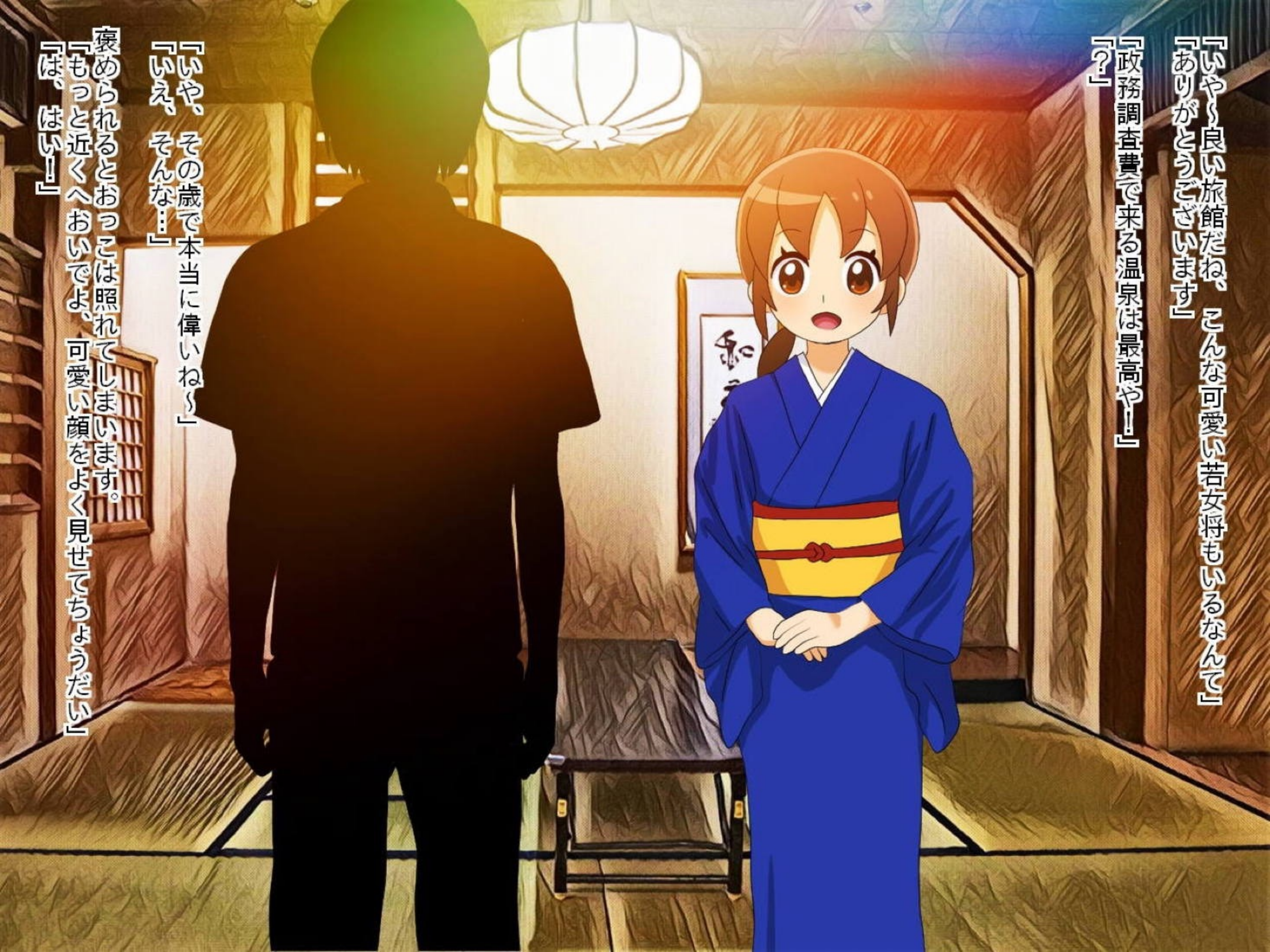
おっことは、いつも以上に張り切ってお客様を部屋へご案内しました。

「いや、良い旅館だね、こんな可愛い若女将もいるなんて」
「ありがとうございます」

「政務調査費で来る温泉は最高や!」
「?」

「いや、その歳で本当に偉いね」
「いえ、そんな!」

「褒められるとおっこは照れてしまいます。
「もっと近くへおいでよ、可愛い顔をよく見せてちょうだい」
「ほ、はい!」



「きゃっ！？」

「お？可愛い反応だね、びっくりしちゃった？」

お客さんがおっこのお尻をさわってきました。



それも、ただ触るだけじゃありません。
そのいやしい手つきは、そういう経験のないおっこでも本能的に危険を感じる
ほどでした。

「やめ！やめてください」

「いいじゃない、これもサービスだから、ね」

「ホントにもう……やめてー!」

おっこは乱暴にお客さんの手を振りほどきました。

「なに?ここ、こっちは客やぞ!なんやその態度は!」

「客ですって?いくらお客様でもやっていいことと悪いことがあるわ!

こんなのセクハラよ!」

「なにい?まったたく、なんちゆう旅館や!」

お客様は憤慨しています。

「あなた、えらい議員さんなんでしょ?そんな人がセクハラなんて!」
「セクハラやて?おま…これのどこがセクハラやねん!スキシツプやんけ!」
「スキシツプって…」
「おっこちゃんだっけ?あんたも仕事でやってんねやる?ここは大人になって
スキシツプやってことで折り合いをつけようやないか」
「…!もういいです!このことはおばあ…女将に報告させていただきます」
「なに!」

「あんまりだあああああ！」

「ええー!?」

議員さんが突然、子どものように泣きわめき出しました!

「お、お客様、おち、落ち着いてください!」

「うわあああん!おではねえ!本当にもう……小さな子どもが大好きで、

だからそういう子ども達に申し訳なくて」

「申し訳ないんだったらやらなきやいいのに……」

「私も死ぬ思いでもう、あれですわ!こんなこと言うのは本当に辛くて情けなくて、子ども達に本当に申し訳ないんですわ!」

「ちょっと、泣き止んでください!わかりましたから!」

おっこが必死になだめますが、議員さんは感情が昂ってしまい、手が付けられ
ません。

「だから!この議員という大きなカテゴリーに比べたら!セクハラなんて!!
うわあああ!——!セク、ハラなんて折り合いをあああああああ!」

「おう、なんやなんや！何泣いとんのや」
「若女将が何を言ってもセクハラやセクハラや言っんですわ」
「なに？どういいうこっちや！」
「少子高齢化はわが国のみならず、日本の問題やないですか！」
「せや」
「誰がやってもおんなじや、誰がやってもおんなじ！」
「なら俺が！うふわああん！俺、があああん！」
「そのとおりやん。ええこと言うなほんま」
「さすがやわ」
「目の付け所が違うわ」
「せやな、我々の手で少子化問題に立ち向かわなあかんわ」

「よっしゃー！子作り支援法案可決や！」
「ふぐああああ！議員として少子化を少しでも解決させたい！そう思うからこそ耐えに耐えて、何とか着床させたいその一心で！やっとな議員になったんです！」
「目からうろこやわ、やっぱ覚悟が違うわ」
「やる時はとんやる男やおもつとつたわ」

だ、だめだ！この人たち何かおかしい！

おっこは盛り上がるお客様に気づかれぬよう、そっと部屋から逃げようとししました！しかし！

「何逃げとんねん！」
見つかってしまい、男たちに羽交い絞めにされてしまいました。

「やめてえ！」

わち

わち

わち

ガシッ

ガッ

「おっこちゃんはまだ若いから政治のこととか日本の未来のこととか
関心がないかもしれないけど、これはすごく大事なことなんや」
「はなしてえ！」
「ヒトの話きいとんのか」

「優しくしてやれば調子こきやがってこのガキやあ」
「痛い目見たくなかったら言うとおりにしろ！」
「こんな旅館の一つや二つ俺の手にかかればあっという間に潰せるんやぞ」

「あーっ」

わん
わん
わん

わん
わん

ん
ん
ん
ん
ん
ん

ガ

「おっちゃんがおっこのおまんこマッサージ器でよくほぐしたるからな」
「未開通やから裂けたらあかんからな」
「子作り保護法案や」

「ああああー！ちよっとやめてッんああああー！」

「子作りは助け合いや！次はおっこちゃん頑張る番や」
「お、おちんちん！？いやっ」
「顔背けるな！よおく観察するんや理科で習ったやろ」
顔を近づけると、つんと臭います

セグッ

グッ

グッ

「ええか、アイスキヤンデー舐めるみたいにくペロペロするんや」
「ええっ!?!」
信じられないことを言われて、思わず聞き返したおっこ。
男は不機嫌になったように
「なんや！アイスキヤンデー好きやないんか！ええからさっさと舌だせ！」

「んむ…んっ、んは…んっ、んっ」
「むむ、うーむ…ええぞ！存外飲み込みが早いやないかい」
「その調子なら立派に若女将やれるやないか…へへ」
「おっ、おっ、出そうや！よし、よしよし、おっこ！回ん中出したるから
ゴックンするんやで」

びゅるびゅる

ビュッ

びゅるるるる

がわ

がわ

がわ

がわ

「んはっ、あ…ああああッ！」
「おちんちんの先から白い液体が噴き出てきました。
（うええええ…なにがくて臭い…なにこれえ！）
「飲み干せよお…吐いたらいてこますぞ」

「やだ…汚い…！そんなところ舐め…」
「おとなしくしてろよ」

ドク
ドク
ドク

びく

びく

ドキ

ドキ

じわ

じわ

じわ

悪い議員さんがおっこのおまんこにむしやぶりつきました。
おっこのとってそこはおしっこをする部分でしか無かったので嫌悪感しか
ありません。

「なんや、その様子やおっこちゃんオナニーもしたらんのか」

「はっ、あっ！なにこれ！」
おっこの反応に熱い吐息が混じり始めました

ジツジツ

はあ

はあ

わう

わう

ん

ん

わう

わう

どく

どく

「お？おっこちゃん、何や色っぽいやないかい」
「え？な、何が…んっ」
「愛液も溢れ出しとる…いっちょ前に発情しやがって
子作りする準備万端やな」
「あっ、んあっ…ふあ…っッ」



「きゃあー!」

ドサッ

カウ

カウ

カウ

カウ

ツン

畳の上に押し倒され、男のいきりたった
ペニスがおっこの膣口に触れました

「な、何するの!」
「うん?おっこちゃんわからんのか。子作り言うてるやろ
保体の授業ちゃんと受けなあかんで!おっこちゃん体育得意なんやろ」

「ぎゃあああああああッッ」

ずん
ッ

セグッ
セグッ

びく
びく

びく

びく

男は一気に腰を打ち付け、おっこのせまい処女穴にペニスが力まかせにねじ込まれました。

「うおおお、処女膜避けるのがわかるわ！
すごいわおっこちゃん、ええおめこちゃん！もうおっこちゃんちゃうわ！
「おめこちゃんや！」「いたいよお〜！」

びく
びく

「やだ！とめ：とめてえ！
いだい！いだいッ：んああッ」
息も絶え絶えに必死に静止するおっこを
無視して男は一心不乱にピストンを繰り返します

「ふへへ：冗談やろ！こんな気持ちいいのに
止められるわけあらへん！」

ずるー

ずんッ

ずるー
ずるー

はあ

びく

びく

はあ

わん

わん

わん

あーん
あーん

あーん
あーん





「ひひひい！おめこちゃんわかるかあ？
 おっちゃんが、おっちゃんがおめこちゃんの
 初めての男何やぞお！おっちゃんがおめこちゃんを
 大人にしたんや！よう覚えとってやあ！」
 「あつあつ、ひぐつ！うわあああ！」
 「ほんでなつ、今からおっちゃんが
 おめこちゃんの中に
 精子びゅびゅーって出すからな！
 したらおっこちゃん
 お母さんになるんや！」

はあ

ずー

ずー

ずー

はあ

わん

わん

ずー

ずー

ずー

ゼクッ

ずー

「お、お母さん…？わたし…が…」
「せやで！げひひ、元気な赤ちゃん孕んで
国民として、少子高齢化対策にを、少しでも
貢献するんやでええ！」
「いやあッ、あッ、うっ、わ、わたしまだ
うあッ！いたいッいいいあぐあああ！」
「議員としてここは断固として腔内出しやあ！
ほないくでええええ！」



びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

あゝあゝ

あゝあゝ

びゅん

びゅん

あゝあゝ



「よっしや！次はおっちゃんがつ濃いザーメンをおっこの子宮に
流し込んでやるからなあ！」
「ああああッ！ふぐううっ…うっ、うっ、うっ、ううっ」

ぱん
ぱん
ぱん

ず
ず

ず
ず

ず
ず

びん

びん

ず
ず

ぱん

ぱん

ぱん

「うぐう…うっ、ううっ、ひん…」
「あらく泣かないでよおっこちゃん、これじゃあおっこちゃん何か悪いことしてるみたいやん！」
「うううっ！うう！」
「気分悪いわくそんなんでこの旅館の若女将やっていけんの？
やれやれ、おっこちゃん射精するわ」

びゅん

ジュルルーツ

ずく

ずく

ずく

がわ

セグッ

セグッ

がわ

セグッ

セグッ



「おおおっ！何やこのおまんこー！ほんまに名器やん！これはすごいわ」
「も、もうやめて：仕事が、仕事しなきや」
「客への接待も大事な仕事やろ！」
「サービスしてくれたら晶屑にするで！」
「や、やだあ！」

ずぱ

ずく

ずく

ずく

ずく

セクヤ

セクヤ

カク

カク



「やだやあらへんがな…うつ、はあ
きもちええなあ…おっこちやあん
わしの愛人にならへんか？めっさ
可愛がったるで…こうやってな！」
「んあああっ！ひ、ひぐう…やめてえ…」

ビクッ

みっ

かっ

かっ

みっ

みっ
ちっ

みっ
ちっ

みっ
ちっ

みっ
ちっ

かっ

かっ

かっ

「よおし、出すぞお！元気なザーメン
ビュビュツッて着床させたるぞ！」
「うあ…あっ、やめ、あッ！」
「おりやああ！孕めえええ！」

セグッ

セグッ

はあ

はあ

びゅっ

びゅっ
びゅっ
びゅっ

びく

はあ

びく

びゅっ
びゅっ





これでもう何回目でしょうか、お客様全員のお相手をして、
それでもまだおっこは解放させてもらえませんが、

「おっちゃんもう疲れてきたわ、おっこちゃん呑み込み早いから
もう任せてもええやろ？おっこちゃんが動いてくれや」
「んあああッ！ま、まだ続けるの…？」
「当たり前やがな！おっこちゃんが立派な便所女将になるまで
議員として誠心誠意面倒みたるでえ！」

「上手いやないか！おっこちゃん、あんたには娼婦の才があるな
この性技を生かせば商売繁盛するでえ！」
「ふっ、うつく：うう！はやくイってえ：！！」
「ひひー！せやなあ！おっこの子宮に：ぶちまけたるわあ！」



ずぱ

ぎゅん
ぎゅん

ぎゅん

ぎゅん

ぎゅん

びん

びん

はあ

ずん

ずん

はあ

せげほ

「よっ！おう！最初はぎゅんぎゅんって痛い
くらいやったけど、使い込んで
どうしてええ塩梅のしまり具合に
なってきたやないか！」
「うぐう！いい、痛い！」
「何や、まだ痛いんか？ちよっとおまんこ
裂けてたからなあ」

「あーイクイクイクイク！あつ、いったわ、
こんな名器に生まれてきてくれて
ありがとうな、おめこちゃん！日本の
未来は明るいわ！」
「はあ、はあ、いっ、も、もうやだあ！助けてえ！」

ビクビク
ビクビク

わん
わん
わん

ぴゅっ♡

びゅーん
びゅーん
びゅーん

はあ

はあ

わん

わん

わん

びぼッ

びびる

ずっ

ずっ

ずっ

びく

びく

びく

かっ

かっ

ぎっ

「ほら 次はこっちや! ちやんとしやぶれよ!」
「んぶううう!」
「フェラも上手くならんと旅館の女将は務まらへんぞ!」
「おめこしこたま突かれまくってもフェラに集中してこそ
プロの接客やからな!」

「こっちはもう出るぞ！そらっそらっ糞ボケ
おまんこギユツと絞めんかい売女！」
「んおおおおおとおおおッ！」
「オラッ！口の方が疎かになっとなるやんけ！
気を散らすなや！」
「おおおおおッ！んおッ！んおッッ」



「よっしや、まあまあ合格やな！
ほな出すで！全部飲み干せ！」
「おぶっ！おごえええええッ！」
「こぼれとる！こぼれとる！何しとんねん
お前は！そんなんで若女将が務まるかい！」
「げほっ！おえっ！んぶうッ」

こぼれ

こぼれ...

かた

かた

かた

ムンムンムン

ビクビク

びゅん
んんんんん

ビクッ

かた

かた

かた

ず
ず
ず





「どれ、そろそろこっちも開発して
 やらなあかんなあ!」
 「うああッ! えっ!? く、苦し…
 そ、そっちは」
 「すげえ! おほっ、何やこれ! めちやめちや
 狭くなった!」
 「あはあッ、あ…あ、息が…」

ずん

はあ
 はあ

ぎん
 ぎん

はあ

ずん
 ずん

ずん
 ずん

ずん

ずん
 ずん

「あ！あひい！くるひっ、やめッ
やめええ！死んじやうッ、うわああ」
「おあー！無理無理！すぐ出るわ！おあー！
「おっこはお尻も名器やな！全身オナホール
やがな」
「いやあああ！」

びゅるびゅーっ

ちゅちゅ
ちゅちゅ

セクッ

セクッ

ずっ
ずっ
かっ
かっ

ビクビク
ビクビク

ドキ

ドキ



「おお、ほんま…すっご…! おっこの二穴半端ないって!
おっこ半端ないって! おまんこの締め付けめっちやギユツとするもん!
こんな耐えられへんやん普通!」

ずくく ちぢちぢ

みく

みく

ずくく ずくく

ずくく あんまり

はあ

くっく

くっく

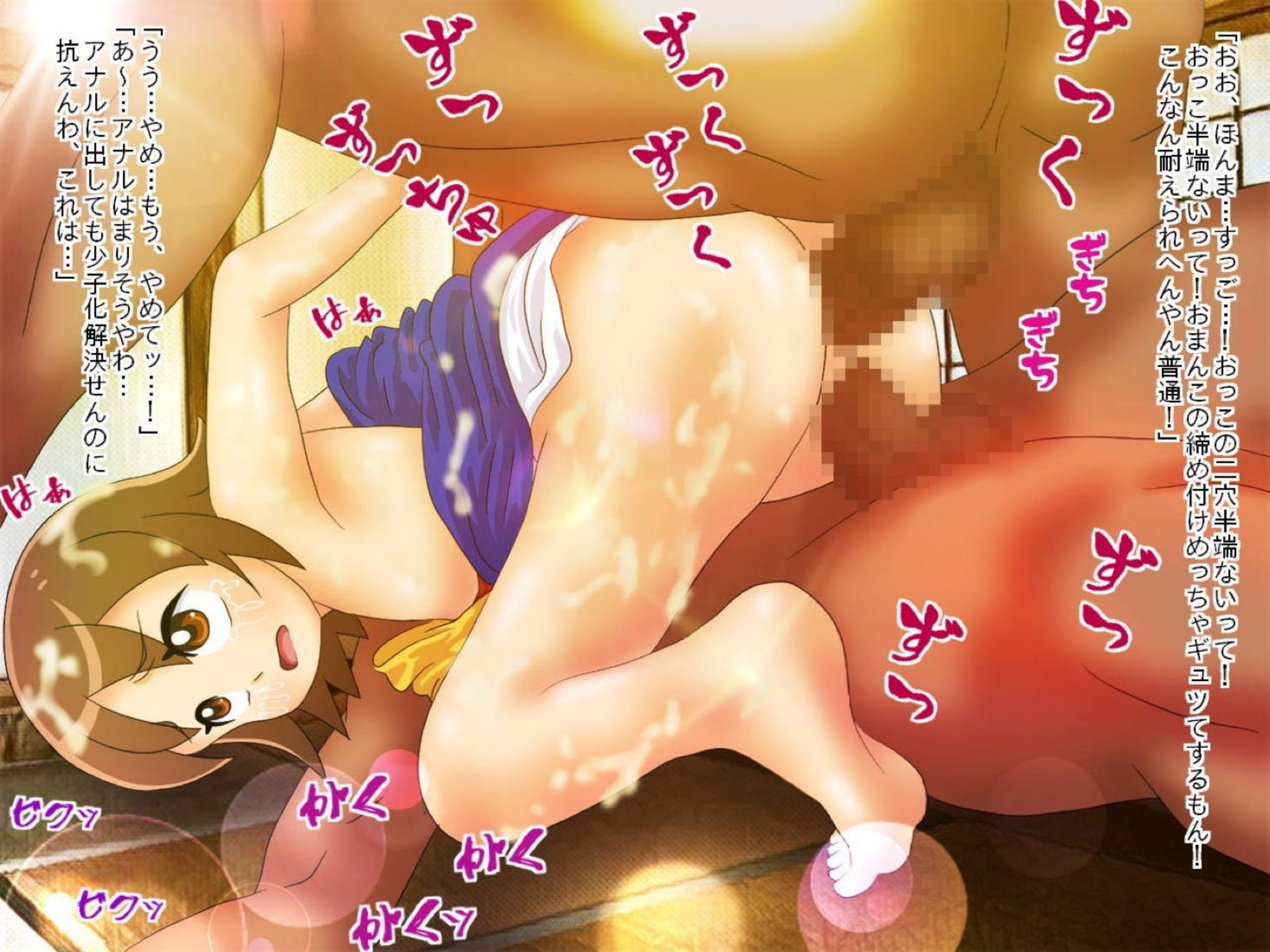
くっく

「うう…やめ…もう、やめてッ…!」
「あ…アナルはまりそうやわ…」
「アナルに出しても少子化解決せんのに
抗えんわ、これは…」

はあ

ピクッ

ピクッ



「くっそお！半端な！出る！搾り取られるわ、これは！
 おっこちゃん身体エッロいわ！あかんわこれ！
 射精待ったなしやん！くおおお！」

びゅーびゅーびゅーびゅー
 めーめーめーめーめー
 びゅーびゅーびゅーびゅー

びゅーびゅーびゅーびゅー
 めーめーめーめーめー
 びゅーびゅーびゅーびゅー

びゅーびゅーびゅーびゅー

「うわあああー！こっちも出る！
 アナルに出しても妊娠せえへんのに！
 出る！出てる！うわああ！尻の中！
 がはああああん！尻の中をッ…ウツ
 変えたたいッ！その一心でえ！ひいいい！
 『あ！あう！う、うるさい！叫ばないで！
 もうやだあああ』」

びゅーびゅーびゅーびゅー

びゅーびゅーびゅーびゅー

はあ

はあ

びく

おち

おち

おち



「おっこ、中々戻らないね！何かあったんだらうか」

「おっこの帰りが遅いので女将が心配しています。」

「女将さん、どうなさったんですか？」

「エツ子さん、実は…」

「え、お嬢さんがお戻りにならない？」

「そうなの」

「わかりました。私がちよっと見てきましょう」

エツ子さんが部屋に向かいました。

「失礼します…こちらに…あっ！」
部屋に入ったエツ子さんが変わり果てたおっこの姿に気付き、大声を上げます。

「お、お嬢さん！」
「あ、まずい」

興奮状態で突っ走っていた議員たちはエツ子さんの姿を見て我に返り、ことの重大さを悟りました。

「あ…あなた達、なんてことを…！」

「…ち、違う…ありえへん…わ、畏や！若女将が○○○なんて

おかしいやないか！それが畏だという証拠や！」

「えっ…！」

「いや…おま…お前が…！」



「ぼっはっはっはっはっ！」
追い詰められた議員が突然高笑いしました。
「な、何を笑ってるんです！あなた達、お嬢さんに何をしたかわかってるんですか！」

「そうや、レイプや。…せやけど…少子化対策や」

「はあ？」

「レイプは犯罪ですよ。犯罪ですけれども！ 議員というそういう大きい括りのなかでは、極々小さいものなんですウー！」

「そんなわけないじゃないですか！」

「少子化問題はー！ 我が県のみうわああーん！ 我が県のみならず！


日本中の問題やないですか！そういう問題を解決したいがために俺はねえ！

ふわあああん！命がけでええええッ！……ツウ、ツク。仲居さん！

あなたには分からないでしょうけどね！」

「わかりませせんよ。女将さーん！警察呼んでえー！」
「あー待って待って！」





その後、議員の皆さんは逮捕されて三ノムースになりました。
どんな理由があってもレイプは絶対してはいけませんね。

PS

おっこはまだ初潮前だったので妊娠はしませんでした。